

孫太郎のちよんぼ（洲本市安乎町）

洲本市安乎〈あいが〉町に、むかし孫太郎という人がいた。

なまけ者で、遊んでばかりいたものだから、とうとうひどく貧乏して、その日の暮らしにもことかくようになった。そこで、尾崎〈おざき〉村のちよんぼという女の人からお米を三石〈ごく〉（約、三人が一年間に食べる量）借りましたが、もともと返すあてなどはありませんでした。

返す期限が過ぎてからというもの、矢のようなさいそく。たまりかねて、孫太郎が、尾崎村のちよんぼの所へ出かけ、いくらことわっても、だめなものはだめ。初め、仲の良かったちよんぼも、冷たく孫太郎をはねつけるばかり。最後には、孫太郎を訴えるとおどかした。

ひとり、暗い山道をとぼとぼと帰りながら、孫太郎は悪い考えをおこした。「ちよんぼさえないけりや、借りた米なんか、返さなくてもいいんじゃないか。もっと早く思いつけばよかった…。」

その夜のやみにまぎれて、孫太郎は役所へ忍びこんだ。当時は、見つかっただけでも大変なことである。孫太郎の目あては米倉〈こめぐら〉。こっそり近づいて、番人のすきを盗んで、米倉の壁に穴をあけて帰ってきた。

翌日、役所の米倉が破られたというので、役人たちは大〈おお〉そうどう。あちらへ走り、こちらへ馬をとぼして、犯人さがしにやつきとなった。それを見すまして孫太郎、何くわぬ顔して役所へ行き、「おそれながら」と申し出た。

「よんべ（昨夜）、わしがこの前を通りかかったら、ここの米倉から米を盗んで逃げていくやつを見かけました。あれは、たしかに尾崎村の、ちよんぼという女〈おなご〉じゃと思います、はい。」

「そうか、よう言うてくれた。後で恩賞〈おんしょう〉をつかわすぞ。」

すぐに、役人が馬をとぼし、ちよんぼが捕えられてきた。ちよんぼは、泣き伏して、自分に罪のないことを申し立てた。

「お役人さま、なんでこのかよわい女手で、あの厚い白壁〈しらかべ〉の倉が破れましようか、お願いでございます。もう一度、破られたという穴を、お調べになってください。」

念のためと、役人が調べ直してみると、その穴は、人が通り抜けられるほど、大きくはなかった。

「これはおかしい、もう一度孫太郎を呼べ。」

ついに、孫太郎の計略〈けいりやく〉がばれてしまい、かわいそうに孫太郎ははりつけ、子供の次郎吉は討首〈うちくび〉となり、五人の倉の番人は追放されてしまいました。

孫太郎がはりつけになった場所は、岩場〈はりば〉といって、その後しばらくは、土地の名として残っていました。また、おろかな心を起したばかりに、子供まで道連れにした孫太郎のことが歌となり、

「安乎〈あいが〉孫太郎、筆のあやまりよ、ちよんぼ心から」

と、女の人や子供たちに歌われたと、昔の本にあります。その歌の意味は、今では、はっきりとはわかりません。

